

レストラン

2022. 12. 15

昨日、カニピラフのレストランを話題にしたら、もう一つ思い出したことがある。裏磐梯の銀座ではないが、中心となる位置に、昔から一軒のレストランがある。私の学生時代もあったのだから、少なくとも40年は経っている。

若い頃は、経済的な余裕がなく、入りたくても入れなかった。店構えに見合った県外ナンバーの外車をはじめとした高級車を見てしまうと、近くに自分の車をとめることもはばかれた。そのイメージをずっと引きずっていたのか、働くようになり、収入を得るようになっても、ずっと入らずにいた。

この夏だったか、ふいに入ってみようと思った。たぶん、昨日のカニピラフもそうなのだが、我が人生も第3コーナーをまわってくると、やり残したくないという意識が働くのだろう。少なからず特別な感慨を抱きながら、店のドアを押した。

店内は、店構え同様、洋風レストランの造りである。昔は、さぞや立派な趣だったのだろうということがうかがえた。この店内で、数えきれないほどの県外からのお客さんをもてなしてきたのだろうと想像することができた。

お店は、老夫婦が切り盛りしていた。メニューはというと、基本的な洋食の品々が並んでいた。こういうときには、鉄則がある。ハンバーグを注文するのである。ハンバーグを食べれば、そのお店のことがわかる。本当は、カレーも気になるのだが。

お料理は間違いなかった。イメージ通りだった。一方、お値段は、私のイメージほどではなかった。首都圏の高級車というほどではなかった。これならば、もっと早く来ればよかった。店内を見渡すと、ピークを過ぎていることは否めなかった。昔ながらの佇まいに、寂しさが感じられるのである。そのお店のもっといいときに来ればよかった。多少、後悔の念が浮かんた。なんだかわるいことをしたような気分襲われた。

物事には、タイミングというものがある。後継者がおり、その方が育っていればいい。そうではなく、老夫婦が何十年もの長きにわたり、心血を注いでいるようなお店の場合には、そのお店が一番輝いているときに訪れたい。

こう考えると、まだまだ行かなければならないお店がある。特に、レストランと呼ばれる範疇に属するお店には、一種の特別感がある。気軽に入れるわけではない。そういう店構えが多い。福島にも、裏磐梯のレストランのように老夫婦が優しい笑顔で迎えてくれるお店がある。機会があったら行くようにしたい。きっと、ハンバーグにするかカレーにするか迷うだろう。